

フラヌールとしてのオブジェクティヴィスト

宮本 文

ユダヤ系移民 2 世のオブジェクティビスト Louis Zukofsky は 1904 年、ニューヨークのロウアーイーストサイドで生まれる。リトアニア系移民の両親は共にイディッシュ語しか話せず、彼にとってもイディッシュ語が第一言語であった。コロンビア大学で英文学を専攻し、その後 Ezra Pound らハイ・モダニストたちと交流しながら英文学の伝統への高度な適応能力を示しながら詩作や批評活動を続けるものの、Zukofsky はその伝統には自分が含まれていないと感じていた。本発表では英文学の伝統から疎外された Zukofsky の自分なるものを「ロウアーイーストサイド育ちの貧しいユダヤ系移民の息子」として検討した。というのも、最初はイディッシュ語演劇で、小学校で英語を学んで以降は英語で英文学の伝統に慣れ親しんできた Zukofsky にとって、自身が連なる形でその伝統を刷新することが創作活動の根底にあるからである。

本発表では、まず Henry James の *The American Scene* (1907) の悪名高いロウアーイーストサイド見聞録に対する Zukofsky の応答を手掛かりに、20 世紀のとば口で、19 世紀の大作家と Zukofsky のロウアーイーストサイドにおける「邂逅」及び「偶然の一致」を検討した。その際に Zukofsky が生まれ育ち歩いたニューヨークの街は、Zukofsky が過去の詩人たちと邂逅を果たし、詩が展開されるトポスとして機能していることに注目した。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて移民が大量に流入した結果、ロウアーイーストサイドは、Jacob Riis が *How the Other Half Lives* (1890) においてその悲惨を世に知らしめた通り、人口密度が非常に高いスラム街であった。そこに程近いワシントン・スクエアに生まれ育った James が、約 20 年間の不在を経てアメリカに戻ってきてその印象を記したのが *The American Scene* である。ロウアーイーストサイドのユダヤ人街の印象を綴った箇所は、そこにいる人々を“a great swarming”と描写し、その群れの細部（すわわち個々の人間）の蠢きを千切られてもなお動き続けるミミズに例えるなどたびたび反ユダヤ主義の例証として引かれるところである。

また、カフェに飛び交うイディッシュ語を耳にした時の“[t]he accent of the very ultimate future, in the States, may be destined to become the most beautiful on the globe and the very music of humanity (here the “ethnic” synthesis shrouds itself thicker than ever); but whatever we shall know it for, certainly, we shall not know it for English—in any sense for which there is an existing literary measure”という記述についても差別的との誹りを浴びることが多いが、James の価値判断は実は言われるほど判然とはしていない。この引用では、英語および英文学の伝統的な旋律が将来何かにとって代わられることを言わんとしているのは確かであろうし、そこに不安な気持ちも読み込むこともできるであろう。が、同時にロウアーイーストサイドの多言語の響きあいによって変容し刷新されるであろう英語の音を、今はまだはっきりとは聞き取れないが人類史上最も美しい音楽として夢想しているのである。これを皮肉と解釈するべきであろうか。

Zukofsky の一家は Riis が報告するスラム街の悲惨の典型例であり、一家は確実に James の見た「夥しい群れ」の一部分を成していたが、Zukofsky は James の言葉を驚くほど肯定的に受け止める。Zukofsky は 1967 年の書簡の中で、James のロウアーイーストサイド訪問を“anything but benevolent.... His historical sense in 1904 was amazing” (Scroggins 22)と書いている。その意味するところは何であろうか。「歴史感覚」に関しては、先の引用の直前でイディッシュ語が飛び交う空間を James は“torture-rooms of the living idiom”に例えて、そこで擬人化された英語が拷問を受けて裂傷を負わされる様が比喩的に描かれていることに注目した。ここでの拷問は移民の流入によってアメリカが新しい姿に変容していく過程を指しているのであろう。が、暴力的なレトリックによって、James は産みの苦しみは不可避ではあるが、同時に、否応にも 20 世紀には新しいアメリカが生まれるだろうと予言するのである。20 世紀の趨勢と付き合わせてみれば、確かに 1904 年当時にしても「驚くべき歴史感覚」と言えよう。

また、メンターである Pound と対比すると、James の「慈悲深さ」はより明瞭になる。Pound はイディッシュ語の口語的なエネルギーを賞賛しつつも味付け程度にしか見ておらず、Zukofsky にユダヤ人的な振る舞いを捨てて本物のアメリカ人になれと再三述べる。Zukofsky のロウアーイーストサイド的なものをめぐる 2 人の姿勢は、2 人がそれぞれ訳した 13 世紀フィレンツェの詩人 Guido Cavalcanti の詩の翻訳において先鋭的に顕れる。Zukofsky はリズムと韻を重視しブルックリン訛りの口語的な表現で、Cavalcanti の詩の構造を厳密に守りながら新しい意味を創出する。いわば、モダニスト御用達のハイカルチャーな文学テキストをロウアーイーストサイド的なものとして変容させたのである。一方、それに激怒した Pound は“DUMB”と罵る手紙を送りつける。

このように頭ごなしにロウアーイーストサイド的なものを否定する Pound に比して、それが時に苛烈なレトリックに向かうとしても（Zukofsky がオブジェクティヴィストの詩学として挙げた 2 つの要素 sincerity と objectification を用いて言うならば）、「誠実」に耳で聞き、耳で聞いたものを「客観化」して未来の旋律を聞こうとする James は「慈悲深く」対等な文学的な父だと言えよう。（但し、Zukofsky と Pound の師弟関係をすべて否定的に捉えることは本意ではない。Pound との一筋縄ではいかない代え難い関係は別の場で論じたい。）

Zukosky はまた自身の詩学について、“writing occurs which is the detail, not mirage, of seeing, of thinking with the things as they exist, and of directing them along a line of melody” (Zukofsky *Poetry* 273)とも述べている。つまり、Zukofsky はモノを象徴レベルで考えたり、抽象化した結果見えるものは幻であり、蜃気楼だと言っている。

このことは、“A”-12 (1951)の中で風変わりな数式で表される彼の詩学 “upper limit music/lower limit speech”にも敷衍できるだろう (右図 Zukofsky “A” 138)。すなわち、下限はスピーチ (街に溢れる声や音) 上限は音楽であり詩はその間にとどまるべきであり、上限の音楽を超えてオブジェクト (すなわちモノ) が象徴や抽象的なものになってはならないのである。James のロウアーイーストサイド見聞録は、これらの詩学の中で捉え直すことができる。



そして、Zukofsky は James の予言を 20 世紀に体現する者として名乗りをあげるのである。“A”-12 の詩の断片で、彼は正統派ユダヤ人になった James との懐かしのロウアーイーストサイドでの邂逅を描く。ここでは非ユダヤ教徒とユダヤ人の倒錯という大仕掛けも、懐かしい街角で旧知の友人に出会えた喜び以上を語ることはない。James という 19 世紀の文学的巨人と同じ地平に立っているという幸福感。ここではハイモダニズムが無視してきたロウアーイーストサイド的なものと英文学が幸せな邂逅を果たしている。この奇想を James の短編 “The Jolly Corner” (1909) の本歌取りとすると、James 同様に数十年にも渡って不在にしていたアメリカに久しぶりに戻った主人公がアメリカに居続けた分身の表情に見出す邪悪さを—それは、英語の旋律の未来について James が怖いもの見たさの好奇心を多分に含みながらも漏らした 20 世紀アメリカへの不安とも重なりあうが—Zukofsky が積極的な希望として読み替えているとも取れるのである。この読み替えからは、Zukofsky が “Poem Beginning ‘The’” (1926) で行った T. S. Eliot の *The Waste Land* (1922) に対する批判的応答の姿勢とも通じ、多様な声が響くアメリカにおいて自らこそがアメリカの詩を刷新するのだという彼の楽観的なまでに強い自負がうかがえるのである。

Zukofsky は “the city of poets” というフレーズを出して、先の “A”-12 におけるユダヤ人 James との邂逅について次のように述べる。“But the bare facts are: I was born in Manhattan, January 23, 1904, the year Henry James returned to the American scene to look at the Lower East Side. The contingency appeals to me as a forecast of the first generation American infusion into twentieth century literature. At one time or another I have lived in all of the boroughs of New York City—for over thirty years in Brooklyn Heights not far from the house on Cranberry Street where Whitman’s *Leaves of Grass* was first printed.” (qtd. in Stanley 28) ここで注目したいのは、Zukofsky が「詩人の都市」であるニューヨークを、自らを過去と結びつけ未来に投影させることを可能にするトポスとして機能させていることである。Zukofsky の文化的背景、すなわち「ロウアーイーストサイド育ちの貧しいユダヤ系移民の息子」なる背景が見出せるのは、“not within an imagined homogeneous Jewish community, but rather on the heterogeneous ‘street level’ of Brooklyn Heights I and other working class neighborhoods around New York” (Abend-David 10) である。Zukofsky の詩学において、多文化的で平等主義的、雑多なニューヨークの歩道は、「ロウアーイーストサイド育ちの貧しいユダヤ系移民の息子」としての自己を James や Walt Whitman へ接続することを可能にし、20 世紀アメリカ詩を刷新する文学的自己を創出する場として特権的な地位を占めているのだ。

最後に “A”-1 (1928) を読むことによって、これまで見てきた Zukofsky の詩学に照らし合わせながら、「詩人の都市」であるニューヨークにおいて、歩行という横断的な行為によって「ロウアーイーストサイド育ちの貧しいユダヤ系移民の息子」としての自己を文学的な過去に接合させながら、どのように 20 世紀の新しいアメリカ詩の刷新を試みたか精読する予定であったが、時間の関係でごく簡単な概要に留めざるをえなかった。“A” は 1928 年から 1974 年にかけて書かれた 24 の movements からなる 800 ページ超の長編詩である。“A”-1 は、過越の祭りの最初の夜であり聖金曜日でもある 1928 年 4 月 5 日の夜、カーネギー・ホールにおけるバッハの「マタイ受難曲」の演奏から始まる。「マタイ受難曲」はフーガの多声的な掛け合いで始まり、バッハが「マタイ受難曲」を初演した 1792 年 4 月 15 日のライプツィヒの街や家庭の多声的な音に横滑りしながら、演奏会は終わる。カーネギー・ホールの扉が開けられるや否や、客の冷めやらぬ興奮と共に「マタイ受難曲」のフーガは一気にニューヨークの歩道のスピーチとなり、反復、再現、拡張と様々な複雑なパターンを辿りながら、Zukofsky のニューヨークに形式を与えて詩的空間へと変容させていくのである。

Abend-David, Dror. “Louis Zukofsky and the West Wing: Metaphors of Mentorship, Yiddish, and Translation at Street Level.”

FORUM. vol. 8, no. 1, 2010, pp. 1–35, doi:10.1075/forum.8.1.01abe.

Fredman, Stephen. *A Menorah for Athena*. University of Chicago Press, 2001.

James, Henry. *The American Scene*. JollyJoy Books Pvt Ltd, 2024. Kindle.

Scroggins, Mark. *The Poem of a Life: A Biography of Louis Zukofsky*. Counterpoint, 2007.

Stanley, Sandra Kumamoto. *Louis Zukofsky and the Transformation of a Modern American Poetics*. U of California P, 1994.

Zukofsky, Louis. “A.” Johns Hopkins UP, 1993.

—. ed. *Poetry: A Magazine of Verse*, 37.5. (February 1931).